

【報告】

「永井荷風と東京」展の企画と実施 —文学展示の方法—

湯川 説子*

目次

はじめに

- 1 文学展示をめぐる現状について
- 2 江戸東京博物館における文学展示
- 3 企画展「永井荷風と東京」展
 - (1) なぜ今「荷風展」なのか
 - (2) 「荷風展」開催の意義
 - (3) 開催時期・開催期間
 - (4) 来館者の予測
 - (5) 資料との出会い
 - (6) 展示構成
 - (7) 展示資料と展示手法
 - (8) 「荷風展」の評価

おわりに

はじめに

1999年（平成11）7月27日より9月5日まで、江戸東京博物館では企画展「永井荷風と東京」展が開催された。本稿は、この展覧会を通して、筆者が博物館の文学展示について日ごろ考えていることを提示しようとするものである。また、博物館の展覧会の記録化の重要性をふまえ、本展覧会の記録を併せて行うものとする。

1 文学展示をめぐる現状について

1967年（昭和42）に開館した（財）日本近代文学館の開館から34年が経ち、近年は自治体が設置した財団法人により運営される文学館が増加し、図書館等に併設の記念室や文庫等を含めれば、

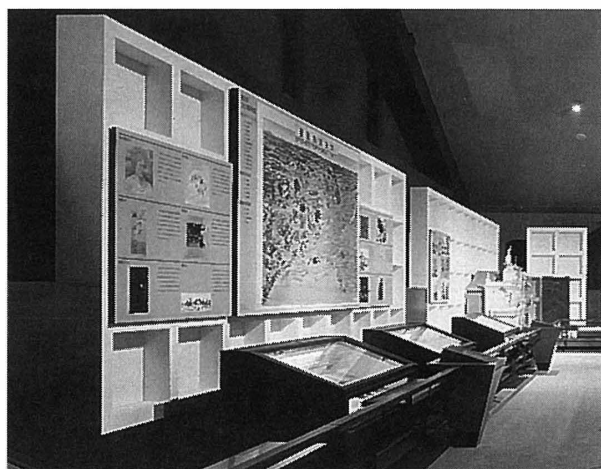
*当館学芸員

2000年（平成12）8月の時点で、478という数の文学館的施設を確認することができる。²⁾ 文学館の機能も資料の収集・保存・閲覧を主とする図書館的な役割から、展示や教育普及活動を含めた博物館としての役割を期待されている。（財）日本近代文学館に事務局を置く全国文学館協議会（会員数は同時点で77館）においては、総務情報部会・展示情報部会・資料情報部会により文学館の具体的な事例報告や共通する諸問題について活発な議論が交わされ、今後の文学館のあり方についての模索がなされている。

2 江戸東京博物館における文学展示

江戸東京博物館は、失われつつある江戸東京の歴史遺産を守るとともに、東京の歴史と文化を回顧することで未来の東京を考える博物館として、1993年（平成5）3月に開館した。³⁾ 常設展示室には、多くの実物資料や複製資料のほか、綿密な調査研究をふまえて復元した大型模型も展示されている。図書室や映像ホール、映像ライブラリーは、江戸東京の歴史や文化をさらに詳しく知る場として、また、ホールや学習室は、各種の普及事業を体験できる場所として、来館者の利用に供している。⁴⁾

常設展示室の東京ゾーン「東京文化展望」のコーナー（写真1）では、文明開化以降、海外の新しい文化や風俗を受け入れ、江戸とつながりながらも不断に変化する東京の姿を伝えることを主眼とし、三つの視点から展示を行っている。一つめは東京の文化施設や娯楽施設に関する展示である。地図や刷り物などの関連資料を展示するとともに『大東京鳥瞰図』（1922年・大正11）には博物館や大学、寄席や活動写真館といった施設を落とし込み、電飾によりその分布状況を伝えている。二つめの視点は東京の文士村や文化サロンにおける文学者たちの交流である。文士村・文化サロンの概要を写真と解説文によってパネル展示し、『大東京鳥瞰図』にもそれらの開催された場所を電飾で示した。三つめの視点は東京を舞台とした文学作品である。明治期から大正期のおもな作品の初版本を展示し、描かれた風景を絵画資料等で紹介している。しかし、文学展示の最終的な目標のひとつとして来館者が作品を読むことを挙げるとすれば、こうした展示手法が望ましい結果を呼んでいるかは疑問である。



（写真1）江戸東京博物館常設展示室「東京文化展望」コーナー

さらに「盛り場浅草」のコーナーでは、明治・大正・昭和のうつりゆく浅草の姿を、錦絵、見世物のチラシ、活動写真のプログラムなどによって紹介している。このなかで、浅草オペラ

の時代を伝える資料として浜本浩の『浅草の灯』を、レビュー劇場カジノフォーリーを表す資料として川端康成の『浅草紅団』を展示し⁵⁾、文学資料を通しての事象の紹介を行っている。「浅草」という地域テーマの展示は、作品に親しみを持ってもらいやすいが、文学は文字によって記された内容が作品そのものであることから、本の展示と150字程度の解説文で作品の雰囲気伝えていくかという点では、限界を感じる。一節を抜き書きしたり、展示解説の際に読み上げたりしているが、来館者の作品を読みたい気持ちを喚起する展示となっているかは心もとない。筆者は1991年（平成3）4月より江戸東京博物館の開館準備に従事し、上記のコーナーの開設に携わってきた。開館後は1995年（平成7）3月までこれらのコーナーを担当し、その後広報関連部署への異動を経て、1998年（平成10）4月よりふたたび当コーナーの担当を受け持つこととなり、効果的な展示手法を考える機会に恵まれてきた。企画展「永井荷風と東京」展の準備は、そのような中で模索されたものであった。

3 企画展「永井荷風と東京」展

(1) なぜ今「荷風展」なのか

江戸東京博物館で開催する企画展では、江戸東京の文化と伝統を伝えるものを中心に、国の内外から資料を求めて、特色ある展示に努めている⁶⁾。

企画展「永井荷風と東京」展は、平成11年度第3回企画展として1999年（平成11）7月27日（火）から9月5日（日）まで開催した（写真2）。その開催趣旨は次の通りである⁷⁾。

東京に生まれ、東京に生きた作家・永井荷風(1879～1959)は、『すみだ川』『腕くらべ』『つゆのあとさき』『湊東綺譚』などの、東京を舞台とした作品のほか、錦絵・歌舞伎・狂歌などについて記した『江戸藝術論』や、東京の散策によって完成させた『日和下駄』といった優れた随筆を数多く著している。また、1915年



(写真2) 企画展会場入口

（大正6）から死の直前まで書かれた日記『断腸亭日乗』は、独居と隠棲の日々の記録であり、時代の風俗を知る貴重な資料でもある。

本企画展では、西洋での生活により培った、日本の表面的な近代化に対する嫌悪と、江戸芸術への憧憬を、生活の中に実践した永井荷風の生涯を追うとともに、荷風がたびたび散策し描いた都市・東京の姿を、うつりゆく風俗とともに紹介した。

なお、1999年（平成11）は荷風の生誕120年・没後40年にあたり、これを記念して展覧会を

開催した。

永井荷風には80年の生涯にわたる人生から、さまざまなエピソードと全集30巻分の作品が残されている。また、生前、そして没後40年の間には、さまざまな角度からの荷風研究が行われ、展覧会も数度開催された。そして荷風といえば花柳小説で知られる耽美派の作家であり、その作品の特性から他の文豪と比べて読者層の年齢が高く、若い世代に馴染みがある作家とは言い難かった。

そのような状況下で当館で荷風展を開催したのは、おもに次の理由からである。明治末期に新しい文学の方法を模索し、その後も優れた作品を創作した荷風の姿は、自己実現を目指す今日の人々にとっても学ぶところが大いにある。また、時代の変化にとらわれず、独りで生きることの自由さを選択し、それゆえの不自由さをも受け入れた生涯からは、偏奇なまでの頑固さが読みとれ、個人の生き方が問われている現代にも見るべきものがある。さらには近年の都市生活に対する関心や散策の流行から、荷風作品に馴染みのない人びとからも興味を持ってもらえるのではないかという考えがあった。

そして幸運なことに、荷風の養子であり著作権継承者でもある永井永光氏、甥である永井阜太郎氏をはじめとする荷風の親族の方々、調査を進めていくなかで出会った荷風関係資料所蔵者の方々の協力を得て、多くの資料を出品することができた。資料を展示して初めて展覧会は成り立つものである。荷風生誕120年・没後40年という記念すべき年に、展覧会の趣旨をご理解いただき、ご尽力をいただいたことを、まずはここに記す。

(2) 「荷風展」開催の意義

生涯学習機関としての博物館を考える場合、そこで開催される展覧会は、調査研究の成果を期待され、訪れる来館者に何を伝えるかを問われるものであろう。これをふまえると、展覧会は歴史的事実や優れた先人の業績を伝えるとともに、普遍的あるいは今日的なテーマを扱うべきものとなる。荷風展の場合は、代表的な作品を紹介すると同時に、作品形成に影響を与えた都市に生きる個人の生き様を伝えることを目標とした。

ところで当館では、自主企画展覧会の実施は、企画者の案を企画展委員会⁸⁾にはかり、その意向を参考にする方式が取られていた。当展覧会の場合は、空襲で住まいの焼けた荷風の筆墨類などを集めるのは難しいのではないか、ひとりの作家を扱うだけで1,000平方メートルの企画展示室が埋まるのか、江戸東京博物館として荷風をどのようにとらえるのか、自筆の原稿や使用したものだけが並んでいるのは望ましくないといった、さまざまな意見が出された。

これに対して、遺品や戦前の筆墨類も残されていること、市内の散策により完成した作品のほか、江戸文化、江戸文人についての研究、日記に見る独居の様子や時代を物語る資料などが展示できることを主張した。また、これまで永井荷風の大規模な展覧会は開かれたことがなく、当館で展覧会を開催し、都市東京との関わりの中でその足跡を伝えるにふさわしい人物であることを示し、最終的には委員会の理解を得ることができた。

(3) 開催時期・開催期間

各種の広報媒体に取り上げられる機会を多くするためには、荷風の生まれた12月もしくは没した4月に実施することが望ましく、また、春・秋は当館の入館者数が多い季節であることから、当初はこの時期の開催を希望した。しかしゴールデンウィークにはすでに他の自主企画展が開催されることが決まっており、秋から冬にかけても、スポンサーがその時期の開催を条件としていた展覧会が準備されてきたことから、開催は夏季の36日間となった。季節がら、文学散歩などの屋外を回る関連事業を計画しなかったが、春・秋に比べて他館で規模の大きな展覧会が開催されることが少ないため、博物館・美術館にたびたび訪れる人びとを呼び込むチャンスが広がるというメリットもあった。しかし一方で、他の行楽地や劇場などの芸術鑑賞施設が強力なライバルとなる。これらをふまえて、夏にふさわしい事業の開催、広報を目指すこととなった。

(4) 来館者の予測

展覧会の開催にあたっては、前もって所要経費を把握しておくと同様に、あらかじめ来館者数の目標をたてる必要がある。来館者数は過去の展覧会のデータなどから予測し、一方で具体的な目標数を設定することで適切な広報戦略を練ることができる。人さえ入れば一過性の企画内容でも構わないという考え方のアンチテーゼとして、企画に関心のある人だけが来てくれれば良いとする考えを持つことは、博物館が公共の施設である以上、誤った認識である。できるだけ多くの人びとに企画内容を伝えるための努力を惜しんではならない。

また来館者数の予測は、入場料や図録売上の収入を予測することもでき、展覧会開催の収支のバランスをあらかじめ設定することも可能となる。さらに核となる来館者層を推定し、第一に彼らに向けて効果的な広報を行うことが重要である。本展では来館者数を過去のデータ⁹⁾から6万人と設定し、核となる層を荷風作品の読者層である60代以上の男性とした。また、荷風の生きていた時代を知っている世代や、若い世代にもアピールすべく広報の方法を探ることとした。

(5) 資料との出会い

晩年まで執筆活動を続けた荷風には全集30巻分の作品¹⁰⁾があり、80年の人生に渡るエピソードが残されている。そして生前はもとより没後40年分の先行研究が存在する。展示構成を作るにあたっては、これらをいかに消化し展示として還元するかが重要な問題であった。そして展示趣旨を物語る資料をどれだけ集められるかが大きな課題であったが、はじめての大規模な荷風展であることから、先行する調査記録も少なく、資料調査には時間がかかることがあらかじめ予測された。

手がかりのひとつに、1990年（平成2）10月7日から11月11日まで市川歴史博物館において開催された「荷風ノ散歩道」展のための調査記録が存在した。永井永光氏所蔵の荷風の遺品について、年代・分量などの資料情報を記したものである¹¹⁾。また『考證永井荷風』（岩波書店 1966年・昭和41）をはじめとする秋庭太郎氏の著作は、荷風の生涯を追いつつ関連する資料の写真を多数掲載したものであり、資料調査を始める上で、大きな参考となった。秋庭氏の著作が出

版されてからは数十年の年月が経っており、所在不明の資料もいくつかあったが、多くはもとの所蔵者のご子孫に引き継がれており、また、それらを快く調査させていただくことができた。

さらに展覧会準備中に、荷風の甥にあたる永井阜太郎氏のお宅が貰い火で被災し、燃え残った家財道具の中から大量の家族宛書簡が発見された¹²⁾。このうち外遊先から家族に宛てたものについては、アメリカ、フランスでの荷風の心の変化を伝える展示資料として、大きな役割を果たすことになった。父母、弟たちに宛てたこれらの書簡からは、遠く離れた家族とのあたたかい交流の様子を読み取ることができる。帰国後、家族とのつながりに嫌悪を示した作品を記したことや、父の死後の弟との不和から、荷風の家族に対する思いはこれまで見えにくくなっていた。そうしたなかでの新資料の発見は、火災という誠に不幸な出来事がきっかけとなってしまったが、永井壯吉の心の底を垣間見る契機を与えてくれた。そして約半数を占める、帰国後に母に宛てた書簡は、母と荷風のつながりを改めて考える大きな発見となり、自作の芝居へ招待する内容の書簡（1920年・大正9 5月21日付）は、具体的な事柄を表すものとして展示に活用することができた。

調査を進めて行くなかで、資料の所蔵者や関係者との出会いから、今まで文献には載ったことのない資料や、さらに新しい資料を所蔵されている方を紹介していただき、それらの多くも出品に結びつけることができた。展覧会は資料によって成り立つものだが、出品に至るまでは、人と人との結びつきが重要であると改めて感じた次第である。

(6) 展示構成

展示の構成は、まずは章立てを行うことから始まり、三つの章をテーマごとに構成した。

第一章は、のちの創作活動に大きな影響を与えたとされる、幼年期や父母に関する資料が集まったこと、何よりも新発見の書簡があることから、誕生から作家として一人立ちするまでというコンセプトで通すこととした。

展覧会全体の構成としては、幼年期から晩年期へ生涯を追いながら作品を紹介する、という筋道をたてたが、それだけでは当館で行う個性が出ない。そこで第二章では、荷風と江戸、荷風と東京との関わりを、時代の流れではなくテーマで捉えてゆくことにした。とは言っても、大正初年から昭和初期までの荷風自身の生活の変化も、合わせて知ってもらわなければならない。さらには代表作である『溷東綺譚』のコーナーは、資料も豊富にあることから、独立させて展示することにした。そして荷風の文学的生活の終焉とも言える、空襲による偏奇館の焼失で第二章を終わらせた。

第三章では晩年の生活を紹介し、死に至るまでをテーマごとに追った。戦後の荷風は文化勲章の授与とあいまって、何かとマスコミの話題にのぼることが多かった。有名な浅草通いや金にまつわるエピソードなどを伝える方法として、描かれた荷風像という視点をういた。また、すべての展示の最後となるコーナーでは、作家・荷風の優れた業績をもう一度考えてもらおうと『断腸亭日乗』原本をテーマごとに展示し、締めくくりとした。

以上のような考えから、展示構成は下記のとおりとなった。これに基づいて作成した会場図面（資料1）も掲載する。

I 荷風誕生

一 「狐」の家

- 1 荷風の系譜 2 楽屋十二時 3 文学志望

二 「あめりか」から「ふらんす」へ

- 1 荷風の青春 2 オペラの夢

三 新帰朝者・荷風

- 1 新帰朝の重み 2 『三田文学』のころ 3 結婚と父の死

II 荷風と江戸・荷風と東京

一 荷風の江戸

- 1 江戸趣味の人 2 「日和下駄」の世界 3 「江戸藝術論」 4 江戸文人と探墓

二 荷風の東京

- 1 荷風ひとり暮らし 2 都市の散歩者 3 「瀬東綺譚」の世界 4 偏奇館炎上

III 荷風の世界

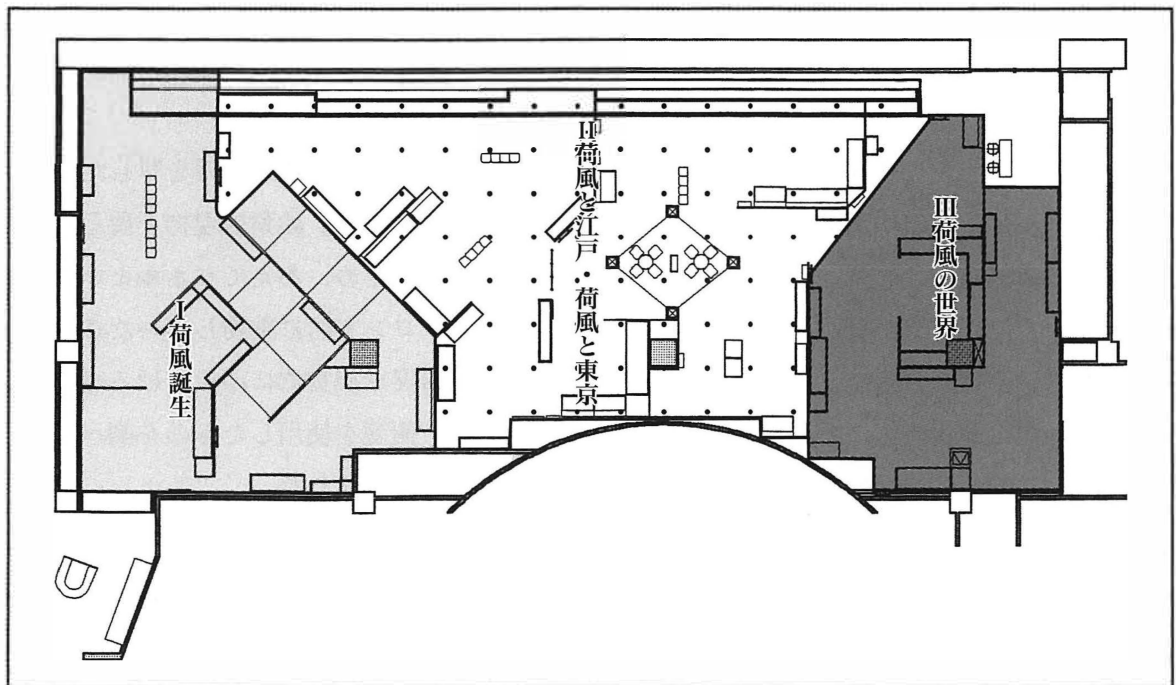
一 市川の散歩道

- 1 荷風の散歩道 2 荷風流生活

二 浅草の荷風散人

- 1 描かれた荷風像 2 正午浅草

三 『断腸亭日乗』の世界



（資料1）会場図面

I章は青色、II章はピンク色、III章は茶色とそれぞれテーマカラーを決め、各項目には300字程度の解説を付した。また章・項目・テーマのタイトルと項目解説には、英文の翻訳を掲載し、パネル表示した(写真3)。

(7) 展示資料と展示手法

資料の展示は、資料の持つどのような情報を観せれば展示のねらいに合致するかを考えながら、項目ごとに出品リストを作成した。同時に展示のストーリーからはみ出るものであっても、資料としてどうしても観せたいものを、どのように展示すれば来館者が混乱することなく理解できるのかを考えた。

第一章の導入部には、来館者が興味深く観てくれるであろうと思われる荷風の「へその緒」を展示し、詳しい解説を付

した。へその緒はまさに身体の一部であることから、見世物的な観方をされる恐れもある。しかし、紅白の水引きがかけられ誕生の日時が記されたへその緒は、荷風がおかれた長男としての立場を示すなど、語るべき多くの情報を持つ資料であった。第一章第一番目の展示資料であり、独立した展示ケースに一点のみで展示することで、来館者に荷風の幼年時代の世界に入ってもらふこととした。

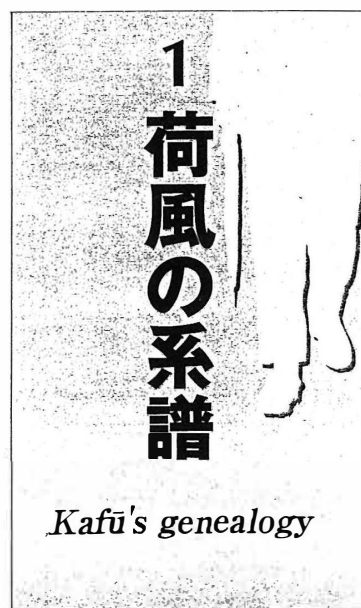
アメリカ、フランス在住時代については、荷風が訪れた場所の同時代の風景を写した絵葉書を写真パネル化し、風景が荷風の心象に影響を与えたことを表した。絵葉書現物を展示することも可能であったが、荷風が一義的に関わった資料と区別するため、あえてパネルという表現をとった。また、荷風が横浜正金銀行ニューヨーク支店、リヨン支店に勤務していたことを展示するため、それぞれの建物の写真に加えて、勤務という事実を視覚的に印象づける実物資料を探した。銀行勤務時代に荷風が記した書簡のうち、銀行の便箋を使用したものを調べて内容を読むと、ストーリー展開できることが確認でき、展示することにした。

帰国後、芝居の創作にとりかかったことは、前述の新発見の母親宛書簡を通して紹介した。母との関係を表す好資料として、母親に近所で買ったパンを届ける内容の書簡も発見されたのだが、ストーリーにあてはめることが難しく展示から外してしまった。

初版本など書籍そのものの展示も、ストーリーに合わせて置くだけではなく、たとえば『す



(写真3-1)
項目タイトル・
解説表示パネル
(900×2700)



(写真3-2)
テーマタイトル表示パネル
(450×768)

みだ川』は胡蝶本（1901年・明治44）、一編本（1915年・大正4）、縮刷本（1916年・大正5）、一編本（1935年・昭和10）を展示し、時代とともにさまざまな装幀のものが出版されたことを示した。

第二章の前半は、「荷風と江戸」というテーマから、愛用の三味線を展示し、荷風作詞の長唄の前唄を音響装置を使って会場に流した。そして時代は下るが、経営していた待合に飾られた自筆の軸や色紙などが数多く借用できたため、これを13メートルにわたってウォールケース内に展示した。文献からこのような資料が存在することはわかっていたが、掲載の写真は白黒で、また軸の表具まで写真に写っていたわけではなかった。調査で華やかな色で表装された軸をはじめて見たとき、これは来館者の目を惹きつけるに違いない資料だということを実感し、まとめて観せることに決めた。

「散柳窓夕栄」は、山東京伝の『小紋新法』より図案を写し取ったものであることから、これを併せて展示した。『日和下駄』については、実際に作品に登場する文献や地図、錦絵などを展示し、荷風自身の江戸文芸に対する造形の深さや、東京の町歩きによってこの作品がつけられたことを表してみた。『江戸藝術論』も、具体的な作品名が挙がっていても記された内容から版本や錦絵などの資料を特定することができるため、これを展示した。また、荷風の作品には、しばしば多種類の装幀をなしたものが見られるが、その一例として表紙の色の異なる2種類の『江戸藝術論』を展示した。漢学者を輩出した母方の祖父の家系や、江戸文人の研究など、時代の流れの前後するものもテーマごとに展示ケースにまとめ、来館者が混乱しないよう配慮した。

第二章の後半、「荷風と東京」は、都市におけるひとり暮らしをテーマの基調として、偏奇館に関連する資料や、日々の生活の中で描いたと思われる筆墨類、健康状態や経済状態を示す資料を紹介した。なお、ひとり暮らしの老人が登場する『雨瀟瀟』は、初版ではなく優れた装幀として知られる野田書房版を展示した。『つゆのあとさき』のそばには織田一磨の描いた銀座のカフェーの石版画を展示し、作品に登場するカフェーの雰囲気由来館者に想像してもらおうと考えた。『つゆのあとさき』と一磨は直接的な関わりはないが、一磨の版画を荷風が絶賛していたこと¹³⁾から、この場にふさわしい資料であると判断したのである。

このほか、しばしば訪ねた銀座の地図や、荷風の撮影した東京郊外の写真、散歩の参考にした江戸の地誌を紹介し、展覧会のサブタイトルとした「都市の散歩者」についての展示を行った。

『湊東綺譚』については、発行されたさまざまな種類の単行本と文庫本・8種を展示してみた。モノとしての書籍を語るために、種類や量の多さで示すという手法を用いたわけだが、よく知られた作品であるからこそ来館者が注目してくれるだろうという期待があった。コーナーの壁面には、木村荘八の描いた挿絵の原画を展示し、該当する本文の抜き書きを脇に示した。

作家展の場合、作品のあらすじは解説できても、本文そのものを読んでもらうという展示は

なかなか難しい。自筆の原稿用紙や書簡は、その作家や作品に親しみのある観覧者に対しては大きな展示効果が期待できる。しかしそれらの小さな文字や崩し字などは読みにくく、たいていは本文を味わっていただくまで行き着かないことが多いと思われる。そこで挿絵の原画とともに本文を読む、という方法を試み、作品に馴染みのない方には、挿絵から作品に興味を持っていただくこととした。作品に詳しい方には、挿絵の原画と共に作品を味わうという贅沢な体験をしていただいた。

作家展では、作品が日々の生活・体験によって生まれた思想と不可分な場合が多いことから、作家の生涯を追う方法がおもに用いられる。これはもっともなことであるが、たとえば画家の展示会の場合、こうした手法をとることは稀である。展示構成は絵画作品が中心となり、画家の生涯を象徴する資料はあくまでも付属物として扱われ、来館者は作品の鑑賞をじっくり行う。文学のような文字を媒体とした芸術作品が、こうしたやり方に馴染まないのは当然である。文学の鑑賞、すなわち読書は、絵画のような作品を鑑賞するのに比べて時間を要するからである。もちろん絵画作品を鑑賞し理解することが文学作品に比べて容易である、とここで言いたいのではない。文学作品の体験は、絵画作品の体験に比べて時間を有し、鑑賞者が理解するまでにより時間がかかるという意味である。

当展示会では、あらすじを紹介するだけでなく、あるいは挿絵に合わせた場面だけの展示ではなく、来館者が主体的に作品を鑑賞できる方法がないかを模索した。そこで思いついたのが、展示室内に読書スペースを設け、来館者に作品を手にとって鑑賞してもらうということであった。全集本はもとより、単行本は手に入るものは初版のものを、また文庫本も揃え、用意した本棚に配架した。休憩スペースを兼ねた読書スペースとして、昭和初期のカフェーをイメージした空間を演出し、そこにテーブルとイスを用意した(写真4)。この際、まわりの展示資料に影響を与えない範囲で、照明も読書のできる程度の明るさに設定した。約1,000平方メートルという広さに恵まれた企画展示室では、このようなスペースを設けることも可能であった。これにより順路を確保しつつ、どのように休憩コーナーを設置するかという問題も解決できた。アンケートで見るとこの読書スペースの試みは幸いにして来館者に好評であったが、文庫本が数冊紛失したことは残念であった。

今回の展示会では、さらなる新資料の発見があった。荷風作のオペラ「葛飾情話」の楽譜と録音記録である。また、関連資料として作家の永井路子氏へ宛てたユーモラスな書簡も出品することができた。楽譜を



(写真4) 読書スペース

展示した脇では「葛飾情話」のクライマックスシーンをタッチボタン式の音響装置により再生した。「荷風の江戸」コーナーでは音曲を取り上げたが、ここ「荷風の東京」コーナーではオペラを扱い、荷風の音楽に対する理解の幅を、音響という同じ手法を用いて二つのコーナーで表した。

1937年（昭和12）に日中戦争が勃発、その後の時局の変化を、荷風は生活者の視点からも日記に記している。当館ではこの時代を表す生活資料を多数所蔵しているが、安易にそれらを展示すると荷風自身の体験や思想についての情報と交錯し、展示ストーリーの理解を妨げる恐れがある。そこで資料そのものではなく、二・二六事件や銀座の空襲などの写真パネルと、対応する日記の箇所を抜き書きしたキャプションを展示することにした。資料としては、1941年（昭和16）12月8日当日に開戦を知らず起稿した作品『浮沈』や、断りなく名前を掲載された日本文学報国会の会員名簿など、直接荷風に関わりのあるものを紹介した。

また、荷風の孤高の砦であった偏奇館の空襲による被災は、重大な事件である。印象的な展示となるよう、ひとつのコーナーにまとめ、持ち出すことのできた日記を入れた手革包と焼け跡から見つかった断腸亭の印を展示した。日記の偏奇館炎上のシーンは、抜き書きしてキャプションで提示、合わせて、数年後に偏奇館の焼け跡に立つ荷風の写真を展示した。

東京での被災後、岡山に疎開した荷風は、谷崎潤一郎と親交を温めることとなる。この二人の作家の交流を表す資料として、それぞれの書簡を展示した。さらにここでは、断腸亭の印が谷崎から荷風に贈られたものであることから、前のコーナーとストーリーをつなげることができた。

戦後、荷風が市川に移り住んでから没するまでの様子は、時代の流れを追いつつも、テーマ展示の手法をとった。まずは市川に江戸の面影を求めての散策、その散策によって生まれた作品などを紹介し、続いてひとり暮らしの様子を、自炊の道具や食器、衣類、愛用の文具などにより展示した。戦後の荷風は、吝嗇ぶりをはじめとし、多くの奇行や浅草通いなど、ともすればこうしたエピソードばかりが目立ちがちだが、興味本位のものとなっては博物館の展示として成立しない。実際、晩年の荷風を見聞きしていた世代の来館者からは、浅草通いの展示に物足りなさを感じた、という意見もいただいたが、ストーリーの成り立たない展示をするわけにはいかない。ここではこうしたエピソードを〈描かれた荷風〉という視点から取り上げ、実績のある老作家だからこそ世間の注目を集めた、というアンブル¹⁴⁾で紹介した。作家の実像と虚像について考えてもらうには、効果的であったと思う。

文化勲章授与のコーナーでは、荷風へのインタビューを収録した映像を用いた。動いている荷風、しゃべっている荷風の画像は、観覧者に強い印象を与えた。特に、タキシードに身を包みつつも前歯の欠けた容貌からは、大作家でありながらも多くの読者に親しまれていた当時の雰囲気伝えることができた。

展覧会で人物を取り上げる場合、そのイメージを喚起するものとしてどのような肖像を使用するかは重要なポイントである。本展覧会では、まず入口のサインパネルにスーツ姿で歩く荷

風の写真を展示し、タイトルの副題にもある「散歩」をイメージしてもらうことを考えた。そして挨拶パネルの横には、タキシード姿で煙草を燻らす写真を使用、伊達男の雰囲気を与えた。また各項目の冒頭に設けた解説パネルには、その時代時代の荷風の肖像を展示、各時代の象徴的な荷風の姿を表すことで項目への導入をうながした。

荷風の死については、「孤独な死」と報じられる一方で、勝手気ままに生き、人に看取られずに死んだことを「最大の勝利」とした意見もあり、どのような展示を行うか悩んだ。「描かれた荷風」という視点から当時の雑誌記事の展示を考えたが、衝撃的な孤独死に加え、晩年の奇行や女性関係、財産問題などを興味本位に書き立てたものが多く、明治、大正、昭和と新しい文学の可能性を模索し創作してきた文豪への畏敬を記したものは、ほとんどみられなかった。しかし、これらの雑誌類を通して、孤独であったがゆえに大衆に注目され支持されてきた作家の生き様を表せるのではないかと考え、展示をすることにした。とは言っても、報道された雑誌だけでは、あまりに見世物的要素が強すぎる。ここで荷風の死に対する考え方を表明し、かつ荷風がどのように葬られ、現代にどのようなメッセージを残しているかを表すため、1940年(昭和15)に従弟に宛てた遺書を展示し、葬儀の様子や墓所、記念碑設立のことについて取り上げた。

展示の最終章では、日記『断腸亭日乗』をまとめて展示した。1917年(大正6)9月16日より亡くなる前日の1959年(昭和34)4月29日まで、42年間にわたって続けられた日記は、荷風の生涯を追ったそれぞれのコーナーで展示することも考えられた。しかし本展では敢えて一カ所にまとめ、しかもテーマごとに展示することで、その資料的な価値を来館者に訴える手法をとった。確かに、日記執筆の動機が記された箇所や草花のスケッチ、東京市中の散歩の様子や日米開戦の日の記述、そして筆禍を恐れて自ら切り取ってしまった箇所など、それぞれの展示コーナーで紹介をした方が、その時々々の荷風を知る上では有効な方法ではある¹⁵⁾。しかし、亡くなる前日まで続けられた日記を書くという行為は荷風の生き方を支えたもので、それを象徴的に表すためには、42年間分の記録の存在をひとつのコーナーで伝える方法こそが適切であると考えた。そしてテーマごとの展示を通して、日記だけでも荷風の多面的な魅力を表せること、すなわち日記の資料としての価値を、テーマ展示という手段を用いて伝えたのである。さらに、モノとしての日記に注目すれば、浄書され製本されたものの美術的な価値はもちろん、戦後のペン書きのノート、下書き用の手帳と、集合的に展示をすることで、それぞれの比較が容易にできるものとなった。なお、このコーナーでも音響装置を用いて、荷風による日記の朗読を再生した。

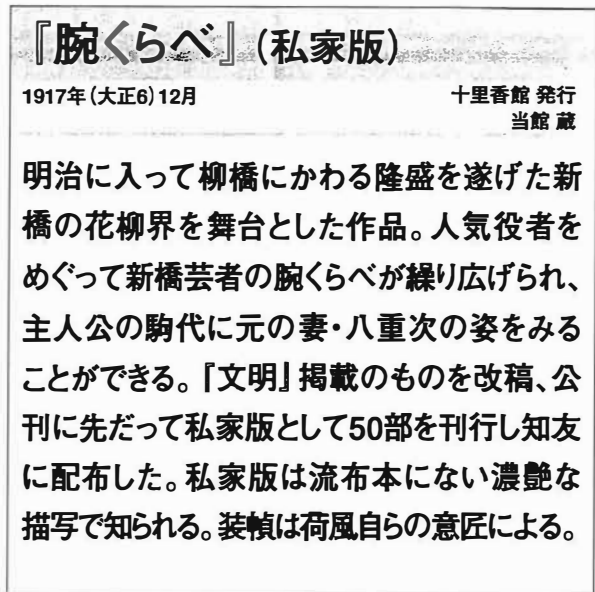
もちろん、生涯を追ったそれぞれのコーナーでも日記の記載内容を紹介したいと考え、日記からの抜き書きを各章においてキャプションとして提示した¹⁶⁾。荷風の生涯の大きな転機であり、日記のクライマックスにあたる偏奇館炎上という事件は、結局このキャプションと、そして日記そのもの、さらには下書き用手帳と、三回にわたって登場することとなった。すなわち、

抜き書きしたキャプションでは記された内容に注目してもらった。そして最終章で日記そのものの偏奇館炎上のページを展示し、モノとしての資料の価値に視点を注いだ。さらに下書き用の手帳の偏奇館炎上のシーンを開き、浄書本との内容の違いを示すことで、荷風の日記が優れた創作であることを表したのである。

キャプションや写真などのパネルには、それぞれ各章ごとに決めたテーマカラーを付し、資料名、時代年代、作者等、所蔵者などを記載、必要に応じて100字～150字程度の解説文を記した¹⁷⁾(写真5)。また前述の通り、作品を引用するキャプションを別に製作した(写真6)。なお、展示した資料の形態は、荷風の著作本、原稿、書簡はもとより、自筆の筆墨類、文具、衣服、生活用具のほか、作品に登場する錦絵や地絵図など多岐にわたったが、いずれも簡潔なわかりやすい解説文となるよう心がけた。その上でモノの持っている力、実物資料の迫力に助けられたのである。

また、読書スペース以外にも、来館者にひとつの作品を通して読んでもらうしかけとして、入口近くに詩「震災」の全文をパネル展示した。「震災」は、関東大震災によって江戸から明治にかけての文化が失われた様子と、明治生まれの作者自身の面影を重ね合わせた作品で、当展示会のコンセプトを象徴する内容でもある。作品そのものの展示であることから、他のパネルのキャプションとの違いを明確にするため、特殊な文字体を使用し、印象的な展示となるよう心がけた。

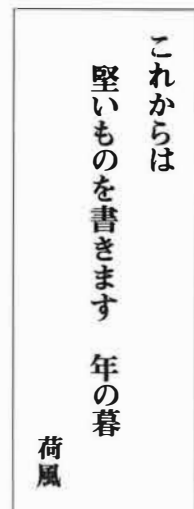
来場者に展示ストーリーを順に追ってもらうため、室内は強制動線としたが、展示ケースの配列上、複雑な順路をとる箇所もできてしまった。そこで、耐久性があり、かつ容易に剝離できる素材を使ったシートを、順路表示として床面に添付した。表示内容には、矢印ではなく下駄のイラスト



(写真5-1) キャプション (150×150)
資料名の部分に章別の色を付した。



(写真5-2) パネル (B3判) 上下に章別の色を付した。



(写真6) 作品引用
キャプション
(150×50)

を印刷し、遊び心を演出した(写真7)。床面での順路表示は、立ち型サインと比べて視界を遮ることがなく、また下駄のイラストも「都市の散歩者」というサブタイトルや、来館者の持つ荷風のイメージと重なる部分があり、好評であった。

(8) 「荷風展」の評価

ところで、平成9年度より当館では常設展示室のリニューアルを計画し、その前段として常設展示室全体の評価を行ってきた。来館者および展示専門家、他館学芸員



(写真7) 下駄のイラストによる順路表示

から寄せられた意見では、「常設展示室・改善への提言」¹⁸⁾によると、「体験コーナーの設置」「観覧を手助けする印刷物」「詳細な解説」「外国語の解説」「テーマの絞り込み」などが必要とされている。これらはそのまま企画展示のあり方へもつながることである。本展でも、こうした点が反映されるよう展示を組み立てた。

また「永井荷風と東京」展開催の一年前にあたる1998年(平成10)の6月から7月にかけて、当館の来館者および若い世代の大学生が、荷風についてどの程度の認識を持っているか、あるいはどのような傾向の展示内容に興味を持っているかを知るため、アンケート調査を行った(資料2)。近年、話題を集めている展示評価のあり方は、企画段階、制作途中、展示公開後のそれぞれで実施、各段階で企画内容の改善をすることが理想とされている。¹⁹⁾今回行った調査のひとつは企画段階におけるもので、設問の多くは荷風の人物像がうかがえる内容とした。荷風展の告知の役割も持たせ、また展示手法についての設問を具体的に提示し、来館者が求める展示について探ってみた。²⁰⁾

まず、大学生を対象に行った調査²¹⁾では、作家としての荷風の認知度は比較的高いが、作品そのものについてはなじみがなく、作品の読書体験は極めて少ないという結果が出た。荷風の人生の出来事で認知度が高いのは『三田文学』の主宰、『断腸亭日乗』の執筆、アメリカやフランスへの遊学、出版物の発禁事件などの理由であった。興味のある展示手法としては、銀座のカフェや偏奇館の復元のほか、コンピュータグラフィックやアニメーションを用いた映像に期待が集まった。また、結果としてアンケートを通して荷風の生き方に興味を持った人も多かった。

江戸東京博物館の来館者を対象とした調査²²⁾では、荷風の認知度は高く、作品については年齢が上がるにつれ認知度、読書体験ともに高くなる傾向があり、『湊東綺譚』を挙げる人が多かった。人生の出来事では、どの年齢でも、出版物の発禁と銀座・玉の井・浅草への散策の認知度が高い。ただし年齢が上がるにつれ、文化勲章受賞後・芸術院会員後の変わらない生活ぶりを

江戸東京博物館では、来年の夏に

「ながい かふう永井荷風と東京」展（仮称）の開催を計画しています。

そこで、よりよい展覧会にするためにアンケート調査を実施することになりました。
皆さん、お忙しいとは思いますが、ご協力お願いいたします。

1. 永井荷風という作家を知っていますか。

1. 知っている 2. 知らない

2. 永井荷風の作品を知っていますか。読んだことがありますか。

1. 知っている 2. 知らない

— 作品名

1. 読んだことがある 2. 読んだことはない

— 作品名

— 感想

3. 永井荷風って、こんな人でした。知っている項目があれば、○をつけてください。

荷風の前半生

1. 荷風は、東京の小石川生れです（明治12年）。
2. 父親は明治政府の高官。荷風は、父の望む出世に反発した人でした。
3. 19歳で、処女作『簾の月』をかかえて、広津柳浪に入門しました。
4. 20歳頃から、芝居寄席遊里に出入りしました。
5. 同じころ、落語家の弟子となり、寄席に出入りしていました。
6. 21歳で歌舞伎座作者見習いになりました。
7. 24歳のとき（明治36年）から、アメリカに約4年間外遊し、その後、フランスへ渡り約1年間過ごしました。
8. 荷風の作品の中には、発禁になったものもあります。
9. 31歳のとき（明治43年）、森鷗外の推薦によって、慶応義塾大学文学科教授に就任し、約6年間つとめました。
10. 同年、「三田文学」を創刊、主宰しました。

荷風の後半生

11. 明治末頃から、荷風の興味や意識は、江戸趣味へと傾きました。
12. 41歳のとき（大正9年）、麻布の洋館に引っ越し、偏寄館（へんきかん）と命名しました。
13. 大正の終わり頃から、小説の取材のため、銀座や玉の井、戦後は浅草へ毎日のように出かけていました。
14. 文化勲章を受賞しても芸術院会員に選ばれても、ひとり狭い家に暮らし、浅草がよいの生活を変えませんでした。
15. 30代に2度結婚しましたが、その後は一生独身で過ごしました。
16. 38歳から79歳で死去するまで、荷風は日記をつけていました。40数年間に渡って書かれたこの日記は『断腸亭日乗』として出版されています。

裏面もあります☞

（資料2-1）江戸東京博物館企画展「永井荷風と東京」展アンケート調査票（企画段階）
本調査は、法政大学講師・村井良子氏の協力により、博物館経営論・情報論の授業の一環として、江戸東京博物館企画展示室および法政大学構内において実施した。

来年開催する「永井荷風と東京」展は、江戸東京博物館らしく「都市とくらし」に焦点をあてながら、荷風が生きた時代、愛したまち、描いた江戸東京を紹介する展示を考えています。

4. もし、次のような展示があったら、あなたは展覧会に来たいと思いますか。
興味がある展示内容に○をつけてください。いくつでもかまいません。

1. 荷風が住んでいた麻布の洋館・偏寄館の復元（あるいは紹介）
2. 荷風が通った銀座のカフェの復元（あるいは紹介）
3. 行きつけだった浅草の洋食屋の復元（あるいは紹介）
4. 映画上映と映画セットの復元／「夢の女」（坂東玉三郎監督）、「瀬東綺譚」など
5. 荷風の服、傘、帽子、愛用品の展示
6. ダンディな荷風（パネルや人形／音声再現つき）と記念撮影ができるコーナー
7. 荷風に変身コーナー（背広と傘、帽子など）
8. コンピュータグラフィックやアニメーションを用いて、荷風の人生や作品を紹介する映像
9. 「日和下駄」で取り上げられた、今はない東京の風景や風物を紹介する写真、絵画、映像や案内パンフレット
10. その他

5. 永井荷風に対して、どんな人物像、イメージを持っていらっしゃいますか。
ご自由にお書きください。

もともとのイメージは？

このアンケートでイメージが変わりましたか。 1. はい 2. いいえ

はいとお答えの方、永井荷風のどんなところに興味を持ちましたか？

●あなたの性別は？ 1. 男 2. 女

●あなたの年齢は？ 1. 12歳以下 2. 13歳～18歳 3. 19歳～34歳
4. 35歳～54歳 5. 55歳～64歳 6. 65歳以上

ご協力ありがとうございました。

(資料2-2)

挙げる人が多くなった。また、どの年齢でも、回答が少ないのは広津柳浪への入門と落語家・歌舞伎作者を目指したことであった。興味のある展示手法については、若い層ほど回答数が多く、どの年齢でも、銀座のカフェの復元に興味がある。また、偏奇館の復元や東京との関わりについての展示を希望する人も多く、反対に人気がないのは、記念撮影と変身のコーナーであった。さらに、もともとの荷風のイメージを、自由な生き方を通じた人、と捉えている回答が多く、前半生に興味を持ったという意見も見られた。

さて、本展覧会における荷風の生き方や、東京との関わりについての展示、『湊東綺譚』や『断腸亭日乗』の展示コーナーを設けたことは、アンケート調査の分析結果や提案と一致している。しかし、偏奇館については、復元するとなると時間や予算をもっとかけなければ中途半端なものしかできあがらないため、絵画や文献資料などの展示にとどめることとした。また、銀座のカフェの復元については、思った以上に多くの要望があったが、時間的、予算的な制約のみならず、荷風の展示なのか東京という都市の展示なのか、焦点がぼやけるように思われ、この要望は本展覧会に取り入れなかった。

展示には、まず資料や十分な研究成果をふまえたストーリーがあり、それに合わせた手法がある。来館者が求める展示を知ることは「わかりやすい」「見やすい」展示を作る上で大切なことだが、こうした条件が満たされた上でその要望を取り入れる必要があると、自分は考えている。

「永井荷風と東京」展開催中にも、展示室の出口においてアンケート調査を実施（資料3）し、会期終了後に分析を行った²³⁾。サンプル数は来場者の4%にあたる1,721である。

回答者の性別は男性が女性をやや上回り、年齢では55歳以上が約半数を占めた。男性は65歳以上が、女性は16歳～34歳の比率が高く、予測した来館者層に加えて、若い世代の女性が見受けられた。都内から訪れた来館者が五割、関東地方が三割で、認知媒体は、新聞に次いで知人からが高く、ポスターや車内広告の割合が高い点が特徴的である。ポスターデザインとして、作家展によく見られる肖像ではなく、荷風の似顔絵を用いたことが、印象を強めたと考えられる。また「生誕120年・没後80年」のロゴマークを製作し、掲載したことも注目を集めた要因であろう。来場者には、過去に当館を訪れた経験のあるリピーターの割合も高かった。

企画の内容については、「テーマ」「展示品」「展示品の見やすさ」「解説」「解説の見やすさ」「図録の内容」と、項目別の評価を行ったところ、5ポイントを最高として平均4.2ポイントという高い評価を得た。自由回答でも「よかった、おもしろかった」「参考になった、実感がもてた、新たな興味が湧いた」という肯定的な意見が多数を占めた。その一方、55歳より上の年齢層では「字が小さい、読みづらい」という意見が多く、内容の評価が高くとも、展示手法に配慮をしなければ、展覧会全体の評価が下がることを認識した。自分にとって、今後、展示を行う上で大きな課題である。下駄による順路表示や学芸員の解説に対する評価は、おおむね良好であった。

企画展「永井荷風と東京」展アンケート

記入日 月 日 ()

本日はご観覧ありがとうございました。今後の参考といたしますのでアンケートにご協力いただきますようお願い申し上げます。

Q 1 あてはまるものを○でかこんでください。

- 1) 性別 ① 男 ② 女
 2) 年齢 ① 15歳以下 ② 16～24歳 ③ 25～34歳 ④ 35～44歳
 ⑤ 45～54歳 ⑥ 55～64歳 ⑦ 65歳以上
 3) 住所 ① 東京都(23区内) ② 東京都(23区外) ③ 関東地方
 ④ その他の都道府県 ⑤ 海外

Q 2 この企画展のことは何でお知りになりましたか?あてはまるものにいくつでも○をつけてください。

- ① 知人 ② ポスター(駅: 線 駅, その他の場所_____)
 ③ 車内広告(JR 営団地下鉄 都営地下鉄 その他私鉄 [線] その他_____)
 ④ チラシ(手に入れられた場所: _____)
 ⑤ テレビ(番組名 _____) ⑥ ラジオ(番組名 _____)
 ⑦ 新聞(読売 朝日 毎日 日経 産経 東京 その他_____)
 ⑧ 雑誌(雑誌名: _____)
 ⑨ 江戸東京博物館のなかで(看板 ポスター チラシ 映像 その他 _____)
 ⑩ その他(_____)

Q 3 江戸東京博物館の企画展をご覧になるのは何回目ですか?あてはまるもの1つだけ○をつけてください。

- ① 初めて ② 2回 ③ 3回以上(回数: 回目)

Q 4 今回は企画展のほかに常設展をご覧になりましたか?

- ① 企画展だけみた ② 両方みる

Q 5 今回の企画展はいかがですか?あてはまるもの1つだけ○をつけてください。

- 1) テーマ

①非常によい	②良い	③普通	④あまり良くない	⑤良くない
--------	-----	-----	----------	-------

 2) 展示について
 (1) 展示品

①非常によい	②良い	③普通	④あまり良くない	⑤良くない
--------	-----	-----	----------	-------

 (2) 展示品の見やすさ

①非常によい	②良い	③普通	④あまり良くない	⑤良くない
--------	-----	-----	----------	-------

 (3) 解説の内容

①非常によい	②良い	③普通	④あまり良くない	⑤良くない
--------	-----	-----	----------	-------

 (4) 解説の見やすさ

①非常によい	②良い	③普通	④あまり良くない	⑤良くない
--------	-----	-----	----------	-------

 3) 図録の内容

①非常によい	②良い	③普通	④あまり良くない	⑤良くない
--------	-----	-----	----------	-------

Q 6 その他ご感想、お気づきの点などがありましたらお聞かせください。(裏面もお使いください)

ご協力ありがとうございました。

(資料3) 江戸東京博物館企画展「永井荷風と東京」展アンケート調査票(展示公開後)

おわりに

1,000平方メートルもの広い企画展示室のスペースを、書籍、原稿、書簡といった小さな資料のみで埋めてしまうことは、観覧者の疲労を招く。そこで、わかりやすく観やすい展示とするために、要所要所で筆墨類や関連資料の紹介に努め、当館における文学展示のあり方を提示した。なお、本展覧会と平行して準備が進められた神奈川県立近代文学館の「永井荷風」展では、荷風の生誕から没するまでを、豊富な資料、書籍、原稿、書簡によって表していたが、コーナーごとにコンパクトにテーマがまとめられ、観覧者の興味をうながす展示となっていた。原稿類については現存するほとんどのものを展示、日記は関連の内容ごとに紹介され、その資料価値をよく訴えていた。挿絵の原画は作品世界を理解するに大きなヒントを与え、中国文学の理解者としての荷風に焦点をあてたコーナーも、圧巻であった。来館者は資料を通して作家の業績に触れ、荷風の世界に更なる興味を示したに違いない。神奈川近代文学館とは協同で資料の調査・借用を行うこともでき、展覧会の準備における館同士のつながりの大切さも感じた。そして双方が違った視点で展示を組み立てたことで、それぞれの役割分担が果たせたのではないかと²⁴⁾思っている。

また、「永井荷風と東京」展では、図録（A4判・220頁）の編集・発行、講演会・講座・展示解説などの関連事業、広報活動、オリジナル絵葉書・テレホンカードといった関連商品の販売などを実施した。なお、来場者数は会期36日間で40,737人であったが、図録は来場者の8.3%にあたる3,319冊を販売し、大きな成果をあげた。

展覧会の終了後、講談社文芸文庫からは『日和下駄』『あめりか物語』が、岩波文庫からは『江戸藝術論』が刊行されて店頭に並び、また、再版となった作品もいくつか見られた。さまざまな逸話で人びとの記憶に残る人生を送った荷風であるが、評価されるべきはやはり彼の作家としての業績である。荷風作品をひとりでも多くの人に味わって欲しいという願いは、展覧会開催の大きな目的であった。『あめりか物語』や『江戸藝術論』は、それまで単行本での入手は困難であった。展覧会をきっかけとして刊行された文庫本は、廉価で手軽なものである。だからこそ、収録された作品は人びとに読み継がれることとなるであろう。

本企画展の開催にあたっては、多くの館職員の協力を得たことは言うまでもないが、厳しいスケジュールの中で、共に準備を進めてきた山崎尚之当館学芸員には特に感謝の意を表したい。

自分にとって、展示を通して触れた作家・永井荷風の魅力には大いに惹かれるものがある。そして、展覧会の準備期間に発見された資料を巡り、新たな荷風像を模索することも今後の大きな課題となることを実感している。

本展覧会では、博物館における文学展示のあり方を提示することができた。これから常設展示や企画展において文学をテーマとした展示を行う場合、この経験を生かせるよう励みたいと思っている。

(2001年(平成13)5月脱稿)

【註】

- 1) 宮瀧交二「文学館における「展示の記録化」に向けて」(『全国文学館協議会会報』第4号 1997年(平成9))
- 2) 木原直彦「全国文学館等一覧表」(『全国文学館協議会会報』第14号 2000年(平成12))
- 3) 江戸東京博物館『ごあんないパンフレット』2001年(平成13)改訂版
- 4) 江戸東京博物館の各施設については毎年発行される『江戸東京博物館要覧』に詳しい。
- 5) 数カ月ごとに展示が入れ替わる。このほか谷崎潤一郎『鮫人』や高見順『如何なる星の下に』などを展示。
- 6) 竹内誠「館長ごあいさつ」(『江戸東京博物館要覧 2000』)
- 7) 「江戸東京博物館〈本館編〉企画展示」(同上6)
- 8) 館外の有識者から成る館長の諮問機関。
- 9) 開催条件が類似する、夏季・冬季に開催された自主企画展を参考とした。
- 10) 『荷風全集』(岩波書店 1992～95年(平成4～7))
- 11) 松岡久美子(元同館学芸員)による資料調査ノート。
- 12) 新発見の書簡については同展示図録の一部を翻刻掲載。のち「新出永井荷風書簡(四十二通)一付、参考書簡」(『文学』 岩波書店 1999秋)に全集未掲載の42通を翻刻紹介している。
- 13) 「織田一磨君作東京風景版畫集の序」(織田一磨『自画石版 東京風景』1917年(大正6))
- 14) 〈描かれた荷風〉という視点については、中村良衛「「奇人」伝説—戦後マスコミの伝えた荷風像」(『ユリイカ』1997年(平成9)3月号)に依るところが大きい。
- 15) 1999年(平成11)10月2日から11月7日まで、神奈川近代文学館において開催された「永井荷風展」では、時代・テーマによって構成されたそれぞれの展示コーナーで『断腸亭日乗』を展示。日記の記された状況を、理解させる効果を呼んでいた。
- 16) 日記以外にも、作品から生家の様子を記した箇所などを抜き出し、キャプションで展示内容に関連させて紹介した。
- 17) 河越雄二・宮瀧交二「展示批評 永井荷風と東京展」(『東京都江戸東京博物館研究報告』第5号 2000年(平成12))では、当展覧会に対する的確あるいはあたたかな批評をいただいた。なかでも、壁面に展示した新聞記事コピーのパネルの文字サイズが小さかったことについては、指摘どおり見にくいもので、今後の展覧会では改善するよう努力したい。
- 18) 『東京都江戸東京博物館 常設展示展示評価調査 平成9年度・10年度 統合・要約編』(1999年(平成11)3月)
- 19) 『琵琶湖博物館研究調査報告17号 ワークショップ&シンポジウム 博物館を評価する視点』(2000年(平成12)3月)
- 20) 来館者を対象とした調査では、企画展示室(「伊能忠敬」展開催中)で調査票を配付・回収。サンプル数273。大学生を対象とした調査では、法政大学構内で調査票を配付・回収。50名の履修学生が、各々20名の学生に対して回収することを目標とした。サンプル数1093。
- 21) アンケート回答者の年齢層は、3.の19歳～34歳が多くを占めた。
- 22) アンケート回答者の年齢は、すべての層に渡って分布したが、1.の12歳以下、2.の13歳～18歳は少なかった。
- 23) 『平成11年度 江戸東京博物館企画展 来館者アンケートの集計・分析等の委託 報告書』(2000年(平成12)3月)
- 24) 1999年(平成11)10月20日に行われた「企画展示「永井荷風と東京展」を批評する—ワシも荷風を考えた—」(行吉正一当館学芸員)においても、両館が異なる視点で展示を組み立てたことについての言及があった。